

2021年11月21日 降誕前第5主日礼拝メッセージ

「かみがたり」

岡嶋千宙伝道師

聖書 サムエル記 下 23章 1-7節

街が赤・緑・白の飾りつけに彩られ、クリスマスソングが流れ出すこの時期。個人的に思い起こす出来事があります。2010年のクリスマス礼拝でわたしは受洗しました。あれから11年経つのですが、その時から、いやもしかしたらそれ以前から、ずっと抱き続けている思いがあります。「わたしにとって、神とはどんな方なんだろう?」「その神にふさわしい、愛される自分とはどんな存在なのだろう?」常に抱いていたそんな思いに、何かしらの答えを見いだしたくて、受洗から3年後に関西学院大学神学部に入學しました。神のことをもっと知ったのなら、答えに至る糸口が見つかるかもしれないと考え、入學したその先で触れた「神学」という営み。「神学」は、英語にすると Theology で、そのもとはギリシア語の theos と logos という単語。theos が「神」、logos が「言葉」あるいは「語り」。つまり、神学とは神の語りあるいは神についての語りで、確かに、関学ではそんな語りにたくさん触れてきました。「ほおーっ!」と納得できるものもあれば、「う〜ん?」と首をかしげたくなるものもあり、むしろ多くの語りたちに触れることで、ますます訳が分からなくなっていくというのが正直なところでした。

関学での学びを終えてから4年ほど経ち、今では、教会で神について、神を証しする聖書について、語る者とされています。依然として「神とは?」という問いかけを抱き続けているのですが、今になって感じるがあります。神についての語り、神の語りは、その語りが自分の言葉として発せられる時にはじめて意味を持つようになる、ということです。もちろん、そこで語られる内容も大切です。でも、その語りをする人、あるいはその語りに触れる人がどういう環境に生き、どういう背景を持ち、どんな状況でその言葉と対峙するのか、そのことが、語られた言葉がその人にとっての真の言葉、神の語りになっているのかどうかを左右する要因になる、と思うようになったのです。別の誰かが放った言葉の受け売りではなくて、その人、この自分、「わたし」が発する言葉になるという感覚。今日与えられている聖書の御言葉にも出てきます。神の語り。ここで語られる神はどんな存在なのか。その語りをする人物はどんな人なのか。そして、その語りが、今、ここでそれを聴く一人ひとりにどう関わり、どう響いてくるのか。みなさんと共に味わってみたいと思います。

この御言葉の背景については、出だしの1節から明確に知ることができます。「ダビデの最後の言葉」。実際に「最後の」ものなのかどうかは微妙なところですが(列王上 2:4-9、歴代上 22:7-16, 22:18-19 などにも「最後」と思われる言葉がある)、これは、おそらく、人生の終わりに向かうなかで、ダビデが自分の歩みを振り返り、「自分にとって、神とはどういう存在だったのか。その神と自分はどう関わってきたのか」ということを想起しながら口にした言葉なのだと考えられます。ここで語られる神の姿。まず、目に入ってくるのは3節にある「イスラエルの岩」という表現です。神を「岩」とする言い方は、特に申命記や詩編で用いられるもので(申 32:4、詩 18 など)、道徳的・倫理的に厳格な神、善悪の基準を司る神、人の行いに応じて報いをもたらす神を示す言葉です。ダビデにとっての神は、良い行

いをする者には祝福を、悪い行いをする者には罰を与える存在。その神を、ダビデは、どこか遠いところにおいて、自分の人生に関与しない存在としては捉えていません。ダビデの語る神は、歴史を創り、その歴史に関与する神として描かれています。今日の聖書箇所、特に前半部分に、創世記の天地創造の場面で用いられている言葉が多く使われているのは、ダビデの語る神が、歴史に介在する神であることを表しています。2 節「主の霊」は、天地が創られる前にあったとされる「神の霊」であり(創 1:2)、同じく 2 節で用いられる「語る」は、天地を整える際に神が言葉を発した、その行為を示す「言う」という言葉です(創 1:3,6,9 など)。また、4 節の「光」は神が創造した「光」で(創 1:3)、同じく 4 節の「若草」は神が地に芽生えさせた「草」と同じ言葉です(創 1:11-12)。全ての創り主であり、被造物の生きる世界に介在し、善悪の判断を司る存在としての神。ダビデはその神が、自分との関係において「すべてを整え」「守り」「救い」と「喜び」をもたらしてくれたのだ(サム下 23:5)と、人生を振り返りながら語るのです。

この部分だけを見るのなら、ダビデの言葉は、それを読み触れるわたしたちにとっての促し、あるいは、励ましの言葉として聞こえてきそうです。わたしたちもまた、そんな神、歴史に介在し、今も生きる神と共にあることができるのだ。神から豊かな祝福を受けることができるのだ。ダビデのように、悪を避け、正しい行いをして、良く生きるならば、わたしたちもまた万物の創り主である神から、「救い」と「喜び」を与えられるはずだ、と。ただし、この言葉を語ったとされるダビデの人物像を確認すると、そう簡単には納得できない空気感が漂ってきます。ダビデの人物像、というより、「ダビデ」として描かれている語り手の姿というべきでしょうか。先ほど 1 節の出だしの言葉を確認した通り、この語りをしている人物はダビデとされています。そのダビデは、まずは「エッサイの子」として紹介されていて、この表現だけなら、親近感が持てます。いってみれば、岡嶋さんちの千宙さん、みたいな感じ。ですが、そのあとに続く言葉をみると、「高く上げられ」「神に油を注がれた者」。一気に距離が広まったように感じられます。どちらも距離感を覚えさせるものなのですが、特に、後者、「油を注がれる」という表現については、神々しすぎて、わたしなんか手を出せない、近づけない人のように思えてしまいます。なにせ、「油を注ぐ」という言葉は、キリスト教会において、イエスを示す「メシア」、「救い主」という意味で使われるようになるのですから。もちろん、サムエル記が執筆された当時は、イエスとの関係性は考えられていません。ただ、サムエル記だけを見ても、「油注がれる」という表現は、人として与えられる最高の呼び名として用いられています。神にも、人にも、認められた存在、最高権力者であり、神に最も愛された人物という意味合い。エッサイさんの息子ダビデであったはずなのに、ぐんっと遠くにいったしまった。ダビデさんではなく、ダビデ様になってしまった。その名前さえ呼ぶことが失礼に当たるような。

ダビデとの距離感をもたらした理由の一つは、サムエル記の編集過程にあると考えられます。この箇所に記された言葉は、もともとは、ダビデとは関係のないところで作られた詩の言葉でした。その詩の言葉を、ダビデよりずっと後の時代に、編集者が今の箇所に挿入したと考えられています。それは、ダビデの王としての正当性を、また、ダビデに続く王家の正当性をアピールするためでした。本来は、王家の血筋に生まれたのではないダビデを正当な王として擁立し、そのダビデにこ

そ、イスラエル王国存続の基盤があることを強調する。イスラエル史上最も偉大な王であったダビデのように生きること、その後生まれ生きる人々にも、神の祝福と神からの繁栄がもたらされるはずだ、という意図が働いているのです。「立派な王、素晴らしい王」として祀られたダビデの姿。サムエル記においては、「ダビデの言葉」とされてはいますが、それは、生身のダビデの言葉ではなく、理想化されたイスラエルの王、イスラエル史上最も偉大な王とされるダビデが語ったように見せかけられた言葉なのです。この背景を考えると、違和感が芽生えてきます。わたしの性格が悪いからでしょうか。個人的には、きれいすぎる、整いすぎているように思えるのです。理想化されたダビデだからこそ発することのできた言葉。権力も、地位も、財力もあるダビデだからこそ言えた言葉。わたしとはかけ離れたところで発せられるそんな言葉に、わたしは自分を同化させることができない。共感することができない。その言葉から、取り残される感覚が残ってしまう。ダビデにとっては「共にあり、全てを整え、守り、救い、喜びを与える」神であるかもしれませんが、ダビデのようになれない者、信仰の純粋さを保てない者、弱い立場にありその日その時を生きるのが精一杯で、信仰の言葉すら忘れてしまいそうになる人たち。そんな人たちは、そもそも神の救いに与ることを最初から想定されていなかった。

いや、でも。人間的にも優れた、最も偉大な王ダビデの言葉として記された神の語りではありますが、ほころびがあります。ここに記された神の姿、神の言葉に触れ、神の救い・喜びを得ることができるのは、何も特別な地位、権力、才能、財力を有した人だけではありません。編集者が、編集者によって祀られたダビデが、忘れていた、目を背けた者たちの声、存在、命が立ち返ってくるからです。5 節。ダビデが、神からの祝福について語る言葉。新共同訳、聖書協会共同訳では、肯定の言葉として訳されています。ニュアンスとしては、ダビデが、神の祝福を受けることを当然と感じ、そうなることを確信している様子が伺えます。続く 6-7 節とあわせて読むと、それがより明らかになります。自分には祝福があって当然だけれども、自分以外の人たち、特に自分に敵対した人は、祝福の枠から外れてしかるべき、神によって裁かれてしかるべきだと述べられるのですから。ですが、原文をたどると、5 節の言葉は、疑問の形で記されています。聖書協会共同訳を基に、原文に忠実に訳し直すと「私の家は神と共にあるのだろうか。……神は、私の救い、私の喜びをすべて叶えてくださるのだろうか」となります。この文脈で考えるなら、祝福を望みながら、ダビデはそれが自分に与えられるのかどうか、不安に感じているというニュアンスが漂ってきます。そして、実際に、ダビデの歩みを振り返ると、不安をもたらす要因は確かに存在していたのです。おそらく、ダビデ自身が身に覚えのある欠点。生身の人間であるがゆえの弱さ。そんな欠点や弱さのために、消されてきた存在や声。たとえば、ダビデの前の王サウルの娘で、サウルとダビデの政治的駆け引きに利用され、ダビデと婚姻関係に入れられながら、最終的に見捨てられたミカル(サム上 18:20-29、19:11-17、25:44、サム下 3:13-16、6:16-23)。妻バトシェバを寝取られ、策略により殺されてしまったウリヤと、ウリヤを殺され、強姦とも思われる仕方に関係を持たされたバトシェバ(サム下 11 章)。異母兄弟にレイプされたのにも関わらず、父ダビデからの助けを得ることができなかったタマル(サム下 13:1-22)。などなど。そのような者たちの声、それは微々たるささやかではあるけれど、信仰の優等生、最も偉大な王として描かれるダビデの言

葉の中に、抗うかのように響き続けているのです。

また、6 節に登場する「よこしまな者」。神から遠い位置にあり、罰を受ける存在の象徴として語られているその者たち。サムエル記の他の箇所では、ダビデや王に敵対する者を呼ぶときに多く用いられるその言葉ですが（サム上 10:27、25:17 など）、一人、その意味合いとは別の姿を有する人物がいます。サムエル記の書名ともなっている「サムエル」という人物の母親。同じ夫のもとにいる別の女性には子どもができるのに、自分には子どもができないことに苦しんでいたその女性ハンナ。彼女は、子どもを生むことができないことを「神が自分の胎を閉ざして」いたからだと考え、苦しみ抜きます（サム上 1 章）。当時の社会では、子どもを産むことが神の祝福であり、また、子どもを持つことが女性が社会で生き抜くための必要条件でした。子どもができず、しかもそれが神によってもたらされた結末であるというのは、どれだけ大きな苦しみだったことでしょうか。神に見放される。その状況にあって、ハンナは、自分自身を「よこしまな者」（聖書協会共同訳「仕え女」、新共同訳「はしため」）と呼びます（サム上 1:11）。後に、彼女は祭司エリと出会い、その出会いを通して、主に目を留められ、子どもを生むことができました。かつての状況が改善されたことを喜び、神を讃える詩を読むハンナは、その一節で次のように語ります。「弱い者を塵の中から立ち上がらせ／貧しい者を芥の中から引き上げ／高貴な者と共に座らせ／栄光の座を継がせてくださる」のが神なのだ、と（サム上 2:8）。

さらに、今日の御言葉 1 節に戻って「エッサイの子」という表現。ダビデの父エッサイ。ルツ記によると、そのエッサイの父はオベド、オベドの父はボアズです。そして、ボアズとの間にオベドを宿した女性は、純血のユダヤの民ではなく、ロトの息子の地を引くモアブ人ルツでした。ユダヤの民からは嫌われていた民族（申 23:4、エズ 9-10 章、ネヘ 13 章）、モアブの人であるルツの存在。

サムエル記の編集者が、また編集者によって描かれたダビデが、見落とし、忘れ、目を背けた事実。それを、ダビデが生きた時代から約 1000 年後に拾い上げた人がいました。ハンナが語った「弱い者・貧しい者と共にある神」の姿を、ご自分の身をもって示してくれたその方。ダビデが奪い取ったバトシェバの子ソロモンの子孫であり、モアブ人ルツの子オベドの子孫であるその方。歴史の中で忘れられてしまいそうな者たちの声を拾い上げ、その声と神の語りとを出会わせた人物。いや、彼自身が神の言葉として、その者たちの生身の存在に触れ、その者たちの声を、命を自分の身に引き受けた人物。キリスト教会が真に油注がれた者、メシア、救い主として信じるイエス。そのイエスの誕生を待ち望むアドヴェントの季節をもうすぐ迎えます。喜びの季節を間近にしながらも、「神はいったいどこにいるのか」「自分は神と共に歩めているのか」「神にふさわしい人物たり得ているのか」と叫び、嘆きたくなる現状に生きるわたしたち。様々な分断が生まれ、その結果蓄積される負の遺産が、特定の属性を持つ人たちだけに押し付けられる世の中。それでも、決して忘れられてはならない。希望を消し去ってはならない。イエスによって示された神の約束は、今もなお生きている。その思い、その希望を抱き、来るべきアドヴェントを迎えたいと願います。